2023・1号

# 直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

51号
2023・1-2023・6

◉特集◉

## 〔直江の津〕五〇冊の総目次

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

## 直江津人として

笠原勇気

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ

## 越後府中の守護所と館

「タケ」と「タテ」にみる権力否定

歴史は「今日」への手紙

## されど〝かわたりもち〟

# 直江津人として

笠原勇気

令和四年七月、三年振りに花火と屋台が共演し、夜の町に祇園囃子が鳴り響きました。子どもの頃から四〇年余り当たり前に目にしてきた祇園祭が二年中断し、こんなに目頭が熱くなた祇園祭は初めてでした。やはり直江津人といったところでしょうか。

私は昭和五十二年に石川県小松市で生まれましたが、直ぐに父母の故郷である直江津へ越し、直江津で育ちました。真行寺幼稚園、直江津小学校、直江津中学校、そして直江津高校と、まさに直江津一色の子ども時代でした。

直江津と言えばやはり祇園祭で、毎年七月になるとそわそわし、小学校の下校路に四ツ屋の屋台小屋が建てられると帰るのも忘れて屋台を眺め、毎日屋台と太鼓の事ばかり考えていたのが、懐かしく思い出されます。

大学を出て直江津に戻り数年、三〇の頃でしょうか、直江津の歴史や史跡に興味を持ち始めました。きっかけはよく覚えていませんが、おそらく子ども時代に見た町と大人になってから見た町の変わりようを感じ始めたからだと思います。時代が進むにつれ、映画館、銭湯、スーパー、駄菓子屋、玩具店など思い出の場所が失われていくのを見て、寂しいと同時に、果たしてその昔の直江津はどうだったのか、どのような歴史を辿ってきたのかを調べるようになりました。

調べ始めて直ぐにわかったことは、「わからない」という事でした。例えば祇園祭を例にとると、屋台の歴史も聞く方や資料によってバラバラだったり、祇園囃子の成り立ちも不明。町内名の由来などについても然り。昭和後期という比較的新しい時代の事でも、あまり資料として残っていないのです。単純に自分に学が無く勉強不足なのも加わり、調べれば調べるほど？　が並びました。今では古書や資料を漁り、幸いにも見識のある方々から教えをいただき少しだけまとまってきましたが、それでも謎が多いのが直江津です。火事が多かったという事もあるのでしょうか、また常に衰退と発展を繰り返してきた町だからでしょうか。そこが何とも直江津らしく、さらに深みにはまっていきました。

元々歴史好きなこともあり、神社仏閣をまわり、古地図を眺め、古い写真を見ていると、その時代の直江津が目に浮かぶようになってきました。想像と子ども時代の風景を思い出して合成し、頭の中で義経になり親鸞になり、謙信になり忠輝になり、小林百哺になり林芙美子になり、はたまたその時代の一町人になり北前船の船頭になり―その人が見た直江津を想像すると、風景は無限に広がります。安国寺や至徳寺にはどんな立派な伽藍が並んでいたんだろう、大神宮からの眺

めはどうだったのだろう、北前船が並んだ海辺は壮観だったろうな。と、妄想は尽きません。

かく言う私も勿論ある時代の一人で、今はなき直江津の風景を思い出します。三角屋根の直江津駅や駅前のいかや三重塔、港沖に見えた石油発掘前塔、直江津小学校グラウンドにそびえたアメリカキササゲの大木、洋風のドレスメーカー女学院の建物、路地にあったマリア像が彫られた壁、サトク・マルマス・ナルスといったスーパーやイイヅカに代表される駄菓子屋の数々など、まだまだ書ききれない程のその時代の絵が浮かびます。今の子どもたちの目に映る直江津は、いったいどんな形で残っていくのでしょうか、思いは未来にも移ります。

直江津地区連合青年会に手を挙げたのは、祇園祭が好きなことはもちろん、そういった時代について学べる絶好の機会と考えたことも大きいです。お蔭で様々な人と出会い貴重な体験ができたことは大変有難く思っています。

子どもたちの前で祇園祭の話をすることも増えました。テレビで観る他地域の山車には大きな木の車輪があるのに、直江津はトラックのシャーシに乗せ、ハンドル（梶棒）がついているのはなぜ？　と聞かれた事があります。私見ですが、これは直江津人の便利なものを取り入れていく＝新しいもの好きの気質がさせたことだと考えています。昔の事を聞いてもよくわからないのも、良い意味で「後ろは見ず常に前へ」という直江津人気質があるのかもしれません。その昔「今町」と呼ばれた意味は、もしかしてここにあるのでは、という気がしてなりません。

末筆ながら、稚拙な私の文章から少しでもそれぞれの時代を思い出し、それを後世に語り継いでいただければこれほど嬉しい事はございません。そのための大切なコミュニティの場である直江津祇園祭が未来永劫続いていくこと、そして直江津が発展していくことを、一直江津人として願っております。



笠原勇気（かさはらゆうき）さん
昭和五二年、石川県小松市生まれ、直江津出身
アクセルデザイン代表
金沢経済大学卒業後直江津に戻り、市内ＩＴ会社勤務を経て平成二二年にＷＥＢ制作を主としたデザイン事務所を設立。
令和三年直江津地区連合青年会会長、なおえつうみまちアート実行委員など、直江津の様々なイベントに携わる〝直江津大好き〟人です。

# 〔直江の津〕
# 50冊の総目次




バックナンバーは上越市立図書館で閲覧できます

平成一三年（二〇〇一）は、聖域無き構造改革を標榜した小泉政権が誕生、アメリカでは九・一一同時多発テロなど騒然とした世情下にありました。

経済もバブル崩壊から一〇年、依然として大型倒産が相次ぎ、完全失業率も五％を記録するなど経済は低迷し、一部には「今は何もしないで、じっと我慢の時代だ」という空気が漂っていました。

そのなかで、経済の立て直しは〝地域文化の見直し〟ではないかと、直江津信用金庫（現上越信用金庫）の外郭団体「なおえつ信金倶楽部」（上越なおえつ信金倶楽部）が地域貢献活動の一環として、一年近い構想期間を経て創刊したのが「直江の津」です。そして令和四年七月一日の発行をもって五〇号を数えました。

発刊の言葉（毎号最終ページに掲載）にもあるように、まず自分の立つ「地べた」を見直そうという「直江の津」は地域をどのように見てきたか。混迷を深める経済状況や終息が見通せない未曽有の感染症の蔓延など、混沌とした今日を考える手掛かりになるのでは、と考え五〇冊の全目次を掲載しその軌跡たどることにしました。

なお、本誌の「直江の津」のタイトルバックの文字は、明治に至って、直江津を正式町名とするよう新潟県に申請したところ、「今町とせよ」と却下されたため、「古来より直江津が正式名称」であると明治一一年、再度願い出て許可された時の福永家文書から集字したものです。

## 第一号（創刊号）　平成一三年三月二〇日　春号

### 発刊の言葉

### ◆特集・直江津を掘る

福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する

浅倉有子（上越教育大学准教授）

掘ったら何が見えるか直江津

中世都市・越後府中・直江の津

小島幸雄（上越市学芸員）

水族館になにを見るか

中村幸弘（上越市立水族博物館館長）

### ◆特別寄稿

心理学的立場から

高嶋正士（吉川区真照寺住職・共立女子大学名誉教授）

### ◆寄稿

石痩庵主　茶人宗次という人

平丸誠（上越市・茶の湯文化学会会員）

春を呼ぶ祭三昧

日光寺けんか祭・春日神社・能生白山神社・五智の祭

東西海陸　直江津の地名

読書びと　夢の途上　ラフカディオ・ハーンの生涯

工藤美代子著

見る目　神饌箱（高台寺蒔絵・上越市有形文化財）

## 第二号　平成一三年六月二〇日　夏号

### 巻頭エッセイ

世界の果て　杉みき子（児童文学作家・上越市在住）

### ◆特集・直江津を掘る

湊町から臨海工業都市へ直江津の産業史

赤羽孝之（上越教育大学教授）

人々のくらしに息づく

「祇園祭」囃子の伝承を通しての一考察

近藤美保子（小学校教諭）

### ◆寄稿

妙高山　現在・過去・未来

早津賢二（妙高火山研究所主宰）
茶室見学ノート石痩庵
佐藤昭夫（庭園・数寄屋建築研究家）
◆インタビュー
上越コンピュータサービス社長　坂詰吉寛
◆なおえつ信金倶楽部講演会
「生活に潤いを」地元の文化を大切に
講師・小林新治（上越市立博物館館長・画家）
東西海陸　越ノ海勇三
読書びと　諫早菖蒲日記　野呂邦暢著
見る目　シンボ凧

**第三号　平成一三年九月二〇日　秋号**
巻頭エッセイ
分岐点　吉越泰雄（上越市在住）
◆特集・直江津を掘る
フォッサ・マグナを境にした東西の日本文化と
南北の国土軸
市川健夫（長野県立歴史館館長・民俗学者）
「緑の島」の物語るもの
大悟法滋（上越教育大学教授）
五〇年で変わった港
◆こんなまちがあった1
百歳バチャとそのふるさと―直江津町古城の思い出
八木登美男（長岡市在住）
◆なおえつ信金倶楽部講演会
「都市景観」から地域と歴史を考える
講師・浅倉有子（上越教育大学准教授）
東西海陸　かわたりもち
読書びと　画家の妻たち　澤地久枝著
見る目　織部柳図徳利

**第四号　平成一三年十二月二〇日　冬号**
巻頭エッセイ
安寿恋しや　馬場和明（直江津出身）
◆特集・直江津を掘る
古老が語った直江津の昔
二〇年前に直江津を掘った人がいた
「古老が語る直江津の昔」より
世界一の山脈　関田山脈　木南均（新潟県土木部砂防課長）
◆投稿
正統なるが故の異形　観音寺向拝鏝絵
佐藤和佳子（鏝絵研究家・京都市在住）
こんなまちがあった2
百歳バチャとそのふるさと―直江津町古城の思い出
八木登美男（長岡市在住）
東西海陸　峠
読書びと　宮本常一を歩く　毛利甚八著
見る目　どぶね

**第五号　平成一四年三月二〇日　春号**
巻頭エッセイ
「ゴチ……？」　米山康久（上越市在住）
◆特集
イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン（北越出版）
能生白山神社　春の大祭と舞楽

土田孝雄（郷土史研究家・糸魚川市在住）

◆投稿

「とんちん館」感傷旅行
濱田研吾（昭和芸能・文化人を中心とした放送・マスコミ史研究家・東京都在住）

東西海陸　鯨食

読書びと　寺暮らし・その日暮らし　森まゆみ著

見る目　木造大日如来坐像（岩殿山）

## 第六号　平成一四年　夏号

巻頭エッセイ

2002年☆直江津の旅？　魚家明子（詩人）

◆特集

米山をめぐる民俗文化
渡邉三四一（柏崎市立博物館学芸員）

報道のなかの祇園祭（北越出版）

山を楽しもう　中高年向け安全登山のすすめ
永島賢司（直江津山岳会）

雪国の固有と呼ばれる植物
長谷川康夫（上越教育大学名誉教授）

◆なおえつ信金倶楽部講演会

信頼回復無くして景気回復なし
割田満（八十二銀行常務取締役）

東西海陸　東西文化の分岐点

読書びと　イワナの夏　湯川豊著

見る目　小林古径亭の美しさ
清水恵一（アトリエ雁木主宰）

## 第七号　平成一四年九月二〇日　秋号

巻頭エッセイ

銀河鉄道駅零時発　関由有子（建築家）

◆特集

直江津五智遊覧の旅（北越出版）

甲信越のみなと　直江津の再生
江塚友之（建築デザイナー）

岩の原ワインの楽しみ　萩原健一（岩の原葡萄園社長）

◆投稿

すみれが大好きだったダン道子先生
星野達雄（ＹＭＣＡ名誉主事）

相馬御風と中山晋平になる上越の新民謡
村山和夫（郷土史研究家）

◆なおえつ信金倶楽部講演会

「地球という館」渡邉隆（上越教育大学学長）

読書びと　ユルスナールの靴　須賀敦子著

見る目　越後の異才　東洋越陳人
笹川修一（上越市立博物館学芸員）

## 第八号　平成一四年一二月二〇日　冬号

巻頭エッセイ

直江津恐怖体験　藤田英明（噺家・三遊亭白鳥　上越市出身）

◆特集

人びとの心を繋ぐ天と地の恵み
桑取谷西横山小正月行事（編集部）

府中八幡社奉納　直江津・五智十二景
小櫻詩直江津付近十二景（北越出版）

春日山神社奉納　東洋越陳人五智遠近詩并序（北越出版）

◆投稿

直江津の音楽文化1　中井ソノ先生の思い出
　箕輪響（指揮者・直江津出身）
健康老化は人類の夢？
　鍋島陽一（京都大学教授・直江津出身）

この秋直江津のまちでやったこと　イベント特集
屋台まち　祇園祭で屋台を出す町内　江塚友之
東西海陸　稲作文化
読書びと　清陰星雨　中井久夫著
「民俗藝術」より「越後直江津の祇園祭」田中武男
見る目　文安三年銘　府中八幡宮　鰐口

**第九号　平成一五年三月二〇日　春号**

巻頭エッセイ
　なぜか、直江津　森子朗（俳人・上越市在住）
◆特集
海の恵み　高田のまちに見える海の印象
　小島幸雄（上越市学芸員）
日本一のカラスのまち　中村雅彦（上越教育大学教授）
◆投稿
直江津の音楽文化2　海の入日・上越吹奏楽団
　箕輪響（指揮者・直江津出身）

高田のまちの近代洋風建築
屋台まち
「浜下駄」
東西海陸　桜餅の東西
読書びと　タマリンドの木　池澤夏樹著
直江津ゆかりの兄弟画家
　笹川修一（上越市立博物館学芸員）

**第一〇号　平成一五年六月二〇日　夏号**

巻頭エッセイ
　マニキュア　佐藤光子（佐藤光子・エッセイスト　東京在住）
◆特集
人が支える「頸城」の大地（北越出版）
たのしいおいしい考古学
　岡村道雄（奈良文化財研究所平城宮発掘調査部長・上越市出身）
◆投稿
今町が生んだ力士　越ノ海勇蔵
　村山和夫（郷土史研究家）

屋台まち
東西海陸　のっぺ
読書びと　神谷恵美子若き心の旅　太田愛人著
見る目　木像一鎮倚像（高田寺町称念寺蔵）

**第一一号　平成一五年九月二〇日　秋号**

巻頭エッセイ
　夕陽と酒　田中孝司（上越市在住）
◆特集
「鉄道唱歌」の旅人（北越出版）
海の総合的試験研究機関と共に歩んで
　伊藤信夫（海洋科学センターむつ研究所長・直江津出身）
◆投稿
江戸城攻略弐万弐千歩のたび　榊原藩下屋敷から皇居まで
　吉越泰雄（文芸高田編集長）
越後から大江山へ行った酒呑童子と茨木童子
　三田村優（元小学校校長・上越在住）

屋台まち
東西海陸　あんこう食
読書びと　中島敦　父から子への南洋だより　河村湊編
見る目　五智国分寺三重塔

**第一二号　平成一五年一二月二〇日　冬号**
巻頭エッセイ
　晶子に至る　柳家小満ん（噺家）
◆特集
働くまち　手しごとの人（北越出版）
南極越冬で考えたこと　南極は環境を学ぶ教室
　横山宏太郎（第三五次日本南極地域観測隊越冬隊長）
画家下村静四郎・妙華（北越出版）
東西海陸　雑煮・汁粉・ぜんざい
読書びと　私のアンネ＝フランク　松谷みよこ著
見る目　守護所の名品　上杉房定と京人

**平成一六年三月　春号　休刊**

**第一三号　平成一六年七月二〇日　夏号**
巻頭エッセイ
　グアンバレ、駅前商店街　橋本秋子（飲食店ウォッチャー・直江津出身）
◆特集
「空洞化」を乗り切る上越地域の工業的発展
　鈴木敏紀（上越教育大学教授）
◆上越なおえつ信金倶楽部講演会
新しい時代の地域づくりに向けて
　上越地域の活性化への取り組み
　村山秀幸（新潟県上越地域振興局長・後に上越市長）
ライオンはみがき創業者　小林富次郎
　久保田好郎（上越市史編纂室長）・（北越出版）
県内初の登録文化財
万内川石積み堰堤群・日影沢床固工群
　後藤正弘（新井砂防事務所歴史研究会）
◆投稿
巴御前を守った光源寺の祖・堀徳兵衛
　三田村優（元小学校長・上越市在住）
カメラの眼　義経記・笈探し・安宅・勧進帳
東西海陸　ちまき
読書びと　夫の右手　香月泰男・香月婦美子著
歴史の風景　海獣葡萄鏡

**第一四号　平成一六年九月一日　秋号**
巻頭エッセイ
　何処へ、行くんだった？　ひぐちきみよ（イラストレーター・上越市在住）
◆特集
「川」の恵み（北越出版・上越市史編纂室長久保田好郎監修）
母なる川、関川の再生を
　濁川明男（上越教育大学教授）
自然豊かな五智公園に出かけよう
　古澤良彰（エコトピア上越理事長）
◆投稿
妙高・池の平温泉開発の恩人　星野錫翁
　星野達雄（東京ＹＭＣＡ名誉主事・池の平在住）
東西海陸　とぶ・こわい

読書びと　聲のさざなみ　道浦母都子著
歴史の風景　御館

**第一五号　平成一六年特別号**

写真特集　変貌するまち
巻頭エッセイ
海の響き　小島幸雄（上越市学芸員）
◆特集
福永家文書に見る「直江津」のまちのかたち
　花岡公貴（上越市史編纂室・学芸員）
「望楼」のある家　高岡市伏木北前船資料館（北越出版）
日本初の従軍記者から国際的平和運動家へ
　山岸（小岩井）多嘉子（北越出版）

**第一六号　平成一六年一二月一日　冬号**

巻頭エッセイ
カメラの眼　時代まつり・おたや・花ロード
東西海陸　かつ丼
読書びと　反省文　ハワイ　山口智子著
歴史の風景　銅印　江向遺跡出土

**第一七号　平成一七年三月一日　春号**

巻頭エッセイ
　被災地で見えてきたこと　寺島善雄（中越地震の小千谷でボランティア活動事務局）
◆特集
「高田」のまちにこめた祈り　中西聰（上越市学芸員）
「地震」（北越出版）
上越地方の地形と地震の可能性
　高野武男（元新潟大学非常勤講師）
カメラの眼　上越市埋蔵文化財センター
東西海陸　文化
読書びと　やがて麗しい五月が訪れ　原篠あき子全詩集
　池澤夏樹編
歴史の風景　小丸山遥拝地の碑

**第一八号　平成一七年六月一日　夏号**

巻頭エッセイ　虫生へ帰る
　中戸正子（旧春日村虫生岩戸うまれ・いわゆる戦没者遺児）
上越の園芸作物（北越出版）
北海道の鮭鱒資源保護の先駆者　ヤソの小池（北越出版）
カメラの眼　まちに賑わいを　互の市
くびきの郷土食　たけのこ汁
東西海陸　ところてん
読書びと　死に臨む態度　上田三四二著
歴史の風景　旧会津藩士墓地

**第一九号　平成一七年九月一日　秋号**

巻頭エッセイ
　良寛さんのように　伊倉潔（直江津出身）
◆特集
景観文学紀行（北越出版）
文人たちが足を止めた赤倉温泉（北越出版）
皇后さまにお酌をした昭和天皇の侍医　村山浩一
　本山幸一（南魚沼市郷土史編纂委員）
くびきの郷土食　のっぺ汁
東西海陸　幻魚
読書びと　雪国はなったらし風土記　無明舎出版

◆投稿
住んでいる街を知る喜び　小川善司（きものの小川店主）
歴史の風景　福島城址

**第二〇号　平成一七年一二月一日　冬号**

巻頭エッセイ
　上流から下流へ　下流から上流へ　富永幸司（三和村神田　有機・無農薬農法）
横道歴史散歩（北越出版）
公平誠実の外交を貫き通して近代外交史を生きた人
　芳澤謙吉（北越出版）

くびきの郷土食　タラ汁
東西海陸　鰻のかば焼き
読書びと　アメリカの風　猿谷要著
歴史の風景「越後騒動」の首謀者小栗美作墓地

**第二一号　平成一八年三月一日　春号**

巻頭エッセイ
　見知らぬ町が原点に　河村一美（高田文化協会事務局長）
◆特集
上越後で子どもたちの食を考える
　学校現場での実践から　牛木功介（管理栄養士）
配流八〇〇年　親鸞の風景1
　松野純孝（仏教学者・元上越教育大学学長）
この人に学べ　盲教育者大森隆碩（北越出版）

カメラの眼　長野ぱてぃお大門　蔵楽座
建物さんぽ　その一　柿崎の砂丘にて
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
　かみえちごを例外の地域にするために
読書びと　翼よ、北に　アン・モロー・リンドバーグ著
　中村妙子著
歴史の風景　東本願寺造営献木・尾神岳殉難の地

**第二二号　平成一八年六月一日　夏号**

巻頭エッセイ
　あたりまえの風景　草間敬子（上越市学芸員・小樽市出身）
◆特集
未来への卵　桑取谷　新しいクニのかたち
　関原剛（かみえちご里山ファン倶楽部　専務理事）
配流八〇〇年　親鸞の風景2
　松野純孝（仏教学者・元上越教育大学学長）
◆上越なおえつ信金倶楽部講演会
小川未明と春日山　人は夢によって生かされる
　小川清隆（春日山神社宮司・植物学者）
この人に学べ　有徳の人山田辰治（北越出版）

カメラの眼　日野宮神社の人たち
読書びと　まなこつぶれば…　敗戦野菊をわたる風　吉田直哉著
建物さんぽ　その二　山の辺に辛夷咲く
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
　わさび栽培への挑戦
地域を映すこどもの眼　川いきる・人いきる
　上越教育大学付属小学校四年

**第二三号　平成一八年九月一日　秋号**

巻頭エッセイ
　ゆきのまち、上越　内藤宏（青森市の企画集団ぷりずむ「ゆきのまち通信」編集長）
一三区まちむらの唄から覗いて見れば（北越出版）
レプリカは「ニセモノ」か？
　笹川修一（小林古径記念美術館学芸員）
◆投稿
御饌米　野本憲雄（元新潟県教育長・直江津出身）
配流八〇〇年　親鸞の風景3
　松野純孝（仏教学者・元上越教育大学学長）
この人に学べ　川合直次（北越出版）
カメラの眼　夏まちなか点描
読書びと　おいてけぼり　州之内徹著
建物さんぽ　その三　潮騒とライオン
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
◆上越産業振興研究所レポート
　わさび栽培への挑戦
地域を映すこどもの眼　川いきる・人いきる
　上越教育大学付属小学校四年

**第二四号　平成一八年一二月一日　冬号**

巻頭エッセイ
　もののけはい　岸田國昭（美術作家・板倉町出身）
◆特集
新潟県鉄道発祥の地記念　一二〇年前の鉄道（北越出版）
金谷山グラフティー　思い出のジャンプ台
川島秋男（ＪＣＶみんなのテレビ局市民ディレクター）
配流八〇〇年　親鸞の風景4
　松野純孝（仏教学者・元上越教育大学学長）
この人に学べ　室孝次郎（北越出版）
カメラの眼　秋まちなか点描
読書びと　同じうたをうたい続けて　神沢利子著
建物さんぽ　その四　侍屋敷の心得
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
　明治の人が考えた地域振興
地域を映すこどもの眼　川いきる・人いきる
　上越教育大学付属小学校四年

**第二五号　平成十九年三月一日　春号**

巻頭エッセイ
　直江津の浜風　江塚友之（江塚建築デザイン主宰直江津在住）
◆特集
「古城」築城四〇〇年　越後福島城を行く
文学の旅　柿崎区角取　笠養の人（北越出版）
配流八〇〇年　親鸞の風景5
　松野純孝（仏教学者・元上越教育大学学長）
この人に学べ　国友末蔵（北越出版）
カメラの眼　新幹線がやってくる
読書びと　知恵の悲しみの時代　長田弘著
建物さんぽ　その五　海辺の幸福感
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
　小布施のまちあるき
アルバムの一枚　直江津水族館

**第二六号　平成一九年六月一日　夏号**

巻頭エッセイ
　春日山との暮らし方　丸山永美子（イラストレーター・現在新潟市在住）
信越トレイル・梨平峠道（北越出版）

越後国府配流八〇〇年
親鸞聖人　上越後への足跡をたどる（北越出版）
◆上越なおえつ信金倶楽部講演会　可能性を求めて
　高井進（陶芸家・妙高市在住）
文学の旅　川原町
　貝になった男　直江津捕虜収容所事件（北越出版）
この人に学べ　高橋達太（北越出版）

カメラの眼　親鸞聖人配流八〇〇年記念法要
読書びと　妻の部屋　古山高麗雄著
建物さんぽ　その六　ゆるぎない暮らしの美徳
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
　直江津知り隊　朝市を訪ねて
アルバムの一枚　郷津駅

**第二七号　平成一九年九月一日　秋号**

巻頭エッセイ
　失われゆくものへの愛惜　村歌のできたころ　成島継紀（元牧村史編纂室長・牧村在住）
◆特集
小木航路　歴史編（北越出版）
佐渡の旅は小木から
　佐藤和佳子（フリーライター・京都市在住）

配流八〇〇年　親鸞の風景6
　松野純孝（仏教学者・元上越教育大学学長）
この人に学べ　富永幸次郎（北越出版）
文学の旅　五智・寺町・北陸道界隈（北越出版）

カメラの眼　壁の崩壊
読書びと　ひとり旅は楽し　池内紀著
建物さんぽ　その七　幸せの器と三つの対話
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
　「使い勝手の良いまち」づくり　我がまちにＬＲＴを
アルバムの一枚　赤道を往復した〝みずあめ〟

**第二八号　平成一九年一二月一日　冬号**

巻頭エッセイ
　直江津ことば　松川ケイ子（上越市章デザイン・直江津生まれ）
◆上越なおえつ信金倶楽部講演会
桑取谷から見えてくる農業とは
安全安心な農作物の供給のために　環境に優しい農業を求めて　上越市における東京農大の取り組み
　藤本彰三（東京農業大学教授）
地域ＦＭ放送の試み　わが街にラジオを！　ＦＭＪ
　森田君夫（エフエム上越放送課長）
配流八〇〇年　親鸞の風景7
　松野純孝（仏教学者・元上越教育大学学長）
文学の旅　高田・直江津・柿崎（北越出版）

カメラの眼　この秋のまちなか
読書びと　石の肺　佐伯一麦著
建物さんぽ　その八　古き革袋にいかなる美酒を？

せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
さよなら寿司
アルバムの一枚　航空母艦と呼ばれた病院

**第二九号　平成二〇年三月一日　春号**
巻頭エッセイ
いのち明滅する町高田　荒川毅（上越ケーブルビジョン・上越市在住）
◆特集
シリーズ上越後のかたち「上越学」への試み
【国都】を探せ　謎の越後国府
小島幸雄（元上越市学芸員）
小木航路　旅情編
関原剛（NPO木と遊ぶ研究所理事長）
文学の旅　黒井・直江津・高田・有間川・名立（北越出版）
この人に学べ　小林百哺（北越出版）
◆投稿　紅葉山人　赤倉・直江津来訪記
村山和夫（郷土史研究家）
カメラの眼　レルヒ祭・あわゆき道中・大持引
読書びと　やさしさ病棟　徳永進著
建物さんぽ　その九　草木の果てまで譲り受けて
せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
じょうえつの近代産業の礎「バテン」
アルバムの一枚　「崩壊」した加賀街道の松

**第三〇号　平成二〇年六月一日　夏号**
巻頭エッセイ
山も川も海もある。ほどよい町もある。はぎはらさとこ（直江津生まれ）
◆特集
シリーズ上越後のかたち「上越学」への試み
苦悩する港　近代直江津港の変転（北越出版）
小木航路　活用編　船がたがいの想いをつなぐ
渡邉恵美（NPO木と遊ぶ研究所）
◆上越なおえつ信金倶楽部講演会
環境からとらえたバイオマス
余った古古米から土に還るプラスチックをつくる
大野孝（アグリフューチャー・じょうえつ）
思い出の黒井村（上）松本恵子（「あしながおじさん」の翻訳者）
文学の旅　上越市
カメラの眼　まちをいきいきと・気比神社春祭
読書びと　書誌学の回廊　林望著
建物さんぽ　その十　水から電気をつくって八十年
せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
えちぜん鉄道の再生に見るコミュニティー鉄道のあり方「鉄道のまち直江津」を取り戻すために
アルバムの一枚　最古の映画館「日活」

**第三一号　平成二〇年九月一日　秋号**
巻頭エッセイ　直江津感傷施行―母の失恋　杉山百合子（元上越教育委員長　上越市在住）
◆特集
シリーズ上越後のかたち「上越学」への試み
縄文人が作った頸城の「自然」

「自然の構成者」としての未来への責任
　五百川裕（上越教育大学教授）
思い出の黒井村（下）松本恵子
◆投稿　芭蕉と関川の渡し　佐藤とみじ
文学の旅　「越後府中」を訪ねる三人の旅人
この人に学べ　滝川美堂（北越出版）

カメラの眼　直江津港フェスティバル
読書びと　忘却の河　福永武彦著
建物さんぽ　その十一　シネマパラダイスの復活を
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
「豊饒の海」を前に漁師のゼネスト　日本の漁業は誰が守るのか
アルバムの一枚　古城界隈の昭和

**第三二号　平成二〇年一二月一日　冬号**

巻頭エッセイ
　このまちも捨てたもんじゃない　前角隆夫（上越市職員）
◆特集
シリーズ上越後のかたち「上越学」への試み
対談「地域力」の源を考える
　歴史に学び明日への鏡とする
小島幸雄（元上越市学芸員）
川村智行（上越教育大学教授）
天地人を歩く（北越出版）
文学の旅　越後府中の饗宴（北越出版）
この人に学べ　滝川美堂（北越出版）

カメラの眼　まちを元気に
読書びと　図書館のある暮らし　竹内紀吉著
建物さんぽ　その十二　仏師と建築家の対話
　せきゆうこ・ひぐちキミヨ
上越産業振興研究所レポート
　長野新幹線佐久平駅と佐久市に学ぶ

**三二号をもって休刊**

**再刊一号**

**第三三号　平成二五年一二月一日**

巻頭エッセイ
　私の「直江津探し物語」　小松光代（安塚区在住・直江津出身）
◆ロングインタビュー
　Ｊホールディングス社長　伊藤利彦
◆特集
越後国府・越後守護所・春日山城・福島城・高田城至る道
「高田開府４００年」の意味１
　小島幸雄（新潟県文化財調査保護指導員）
歴史は「今日」への手紙　謎の青年千代垣素直

**第三四号　平成二六年七月一日**

巻頭エッセイ
　私の「直江津探し物語」　森田君夫（エフエム上越放送課長）
◆特集
人工メタンハイドレート
　中学生がメタンハイドレートを作った
大火のまち直江津の歴史遺産
　「座敷蔵」を考える
越後国府・越後守護所・春日山城・福島城・高田城至る

道

「高田開府４００年」の意味２
　小島幸雄（新潟県文化財調査保護指導員）
歴史は「今日」への手紙　八坂神社を巡る

**第三五号　平成二六年一二月一日**

巻頭エッセイ
　ぶらっと路草　港まち直江津　野本幸（エム・コミュニケーション　糸魚川市在住）
◆ロングインタビュー
　えちごトキめき鉄道社長　嶋津忠裕
◆特集
越後国府・越後守護所・春日山城・福島城・高田城至る道
「高田開府４００年」の意味３
　高田城は危機管理の城
　　小島幸雄（新潟県文化財調査保護指導員）
歴史は「今日」への手紙　福永十三郎の恩

**第三六号　平成二七年七月一日**

巻頭エッセイ
　直江津の将来を思う独り言　籠島幹（なおえつ WHITE CATS 店主・直江津出身）
◆特集
旅する祭り直江津祇園祭
座談会　まちのこと祇園のこと
直江津の民謡
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
　春日山城と越後府中１
　　春日山城国史跡指八〇年によせて
　　小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙
　「五智国分寺」の道標が見た人たち

**第三七号　平成二七年一二月一日**

巻頭エッセイ
　鉛色の空の物語　保坂清美（リアルエステイト・ゼスト代表　直江津出身）
◆特集
物語に見る「直江の津」のかたち（北越出版）
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
　春日山城と越後府中２
　　春日山城国史跡指八〇年によせて
　　小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙
　関東管領上杉憲政を顕彰する人たち

**第三八号　平成二八年七月一日**

巻頭エッセイ
　直江津＝直江津祇園祭　丸山岳人（まちづくり上越・上越商工会議所　直江津出身）
◆特集
三八協が紙芝居をつくると（北越出版）
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
　湊町・直江津―安寿と厨子王フォーラム
　　小島幸雄（上越市専門学芸員）

歴史は「今日」への手紙
やさしく解説いまさら聞けない真田の歴史

**第三九号　平成二八年一二月一日**

巻頭エッセイ
わたしの直江津とは　ひぐちきみよ（イラストレーター　上越市在住）
◆特集「北前船」のまちを巡る（北越出版）
おらが在所　昭和五年の座談会
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中3
平成二八年七月二七日の春日山
小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙
直江津水道発祥の地　水源公園

**第四〇号　平成二九年七月一日**

巻頭エッセイ
私の直江津　〝グラフティー〟　笠原謙二（珈琲工房かさはら　直江津出身）
◆ロングインタビュー
上越市立水族博物館館長　櫻健太郎
◆特集
おらが在所　昭和五年の座談会
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中4
公図を読む―土地に刻まれたまちの歴史
小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙
北陸御巡幸　明治天皇聖跡

**第四一号　平成二八年一二月一日**

巻頭エッセイ
記憶の底に生き続けるまち　鈴木のり子（直江津出身）
◆特集
提言 長期的視点から上越人に考えていただきたいこと
伊藤利彦（元Jホールディングス社長）
おらが在所　昭和五年の座談会
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中5
港町と笏谷石～商品だったバラスト
小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙　番外編

**第四二号　平成三〇年七月一日**

巻頭エッセイ
私のまち、直江津祇園祭　富塚稔（えちごトキめき鉄道　直江津出身）
◆ロングインタビュー
えちごトキめき鉄道社長　嶋津忠裕
◆特集
おらが在所　昭和五年の座談会
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中6
笏谷石に見る越後府中と直江津今町を見る
小島幸雄（上越市専門学芸員）

歴史は「今日」への手紙　古老の言葉を聞きなおす

**第四三号　令和二〇年一月一日**

巻頭エッセイ
　このまちの魅力　三宅莉依（石川県出身）
◆特集
「日本遺産」認定記念　北前船寄港地・船主集落とは
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
　春日山城と越後府中7
　笏谷石を求めて
　　小島幸雄（上越市専門学芸員）

歴史は「今日」への手紙　市民の名誉「どぶね」

**第四四号　令和一年六月一日**

巻頭エッセイ
　雨のち虹、そして晴れ　石川昌弘（日鉄工材社長・東京都出身）
◆ロングインタビュー
　高田世界館館主　岸田國昭
◆特集
驚き、江戸時代生まれの座談会
頸城の空間を駆ける　国府・春日山・府中・直江津へ1
　川と用水～高田平野を穀倉地帯とした主役たち～
　　小島幸雄（上越市専門学芸員）

**第四五号　令和二年一月一日**

巻頭エッセイ
　直江津の魅力を再発見　小幡友紀子（上越市職員）
◆ロングインタビュー
　えちごトキめき鉄道社長　鳥塚亮
◆特集
おらが在所　昭和五年の座談会
頸城の空間を駆ける　国府・春日山・府中・直江津へ2
名立町史の一枚の写真
　町史に載る「竹之内」の写真に関する試論 その1
　　小島幸雄（上越市専門学芸員）

歴史は「今日」への手紙　番外編
　差出人不明の手紙

**第四六号　令和二年七月一日**

巻頭エッセイ
　〝まほろば〟の地に住まいして　江塚友之（建築・家具デザイナー・暮らしの道具屋 Linne）
◆特集
「災厄」を歴史に見る（北越出版）
おらが在所　昭和五年の座談会
絵はがきからまちの近代を読み解く（北越出版）
頸城の空間を駆ける　国府・春日山・府中・直江津へ3
　町史に載る「竹之内」の写真に関する試論 その2
　　小島幸雄（上越市専門学芸員）

歴史は「今日」への手紙　記念碑

**第四七号　令和三年一月一日**

巻頭エッセイ
　すきな路すきな時　ひぐちキミヨ（イラストレーター　上越市在住）
◆ロングインタビュー

無印良品直江津コミュニティーマネージャー古谷信人
おらが在所　昭和五年の座談会
頸城の空間を駆ける　国府・春日山・府中・直江津へ4
名立から考えた府中の都市空間
小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙
絵はがきからまちの近代を読み解く

**第四八号　令和三年七月一日**

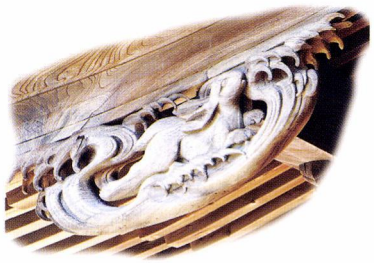
巻頭エッセイ
直江津　今は昔の三題噺　堺寛彦（大学講師　直江津出身）
◆特集
トキ鉄直江津D51レールパークを歩く（北越出版）
高田・直江津合併　上越市発足五〇年
一〇〇年前に「上越発展策」を提言した人たち
頸城の空間を駆ける　国府・春日山・府中・直江津へ5
頸城平野に稲作が伝わったころ
小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙
直江津ヤラシャレ踊

**第四九号　令和四年一月一日**

巻頭エッセイ
直江津の歴史に触れて　小林優樹（上越市教育委員会職員）
◆特集　夏から秋へなおえつうみまちアート（北越出版）
高田・直江津合併　上越市発足五〇年
一〇〇年前に「上越発展策」を提言した人たちII
頸城の空間を駆ける　国府・春日山・府中・直江津へ6
府中の宴〝瓦灯〟を素材として
小島幸雄（上越市専門学芸員）
歴史は「今日」への手紙
笏谷石鳥居柱を巡って
様々な歴史の声に耳を傾ける

**第五〇号　令和四年七月一日**

巻頭エッセイ
直江津の海とサメに想いを馳せて井部真理（郷土料理・サメ食文化研究家・kitchenstudio いべまり　富山県出身）
◆特集
昭和十九年十二月　直江津国民學校疎開児童感想文
高田・直江津合併　上越市発足五〇年
一〇〇年前に「上越発展策」を提言した人たちII
頸城の空間を駆ける　国府・春日山・府中・直江津へ7
文化財にかかわった半世紀
小島幸雄（元上越市学芸員）
歴史は「今日」への手紙
藍商人がつなぐ住吉神社と泉蔵院



波兎（八坂神社向拝）江戸時代末
作者 寄町（住吉町）の２代目高橋冨吉
　波兎は謡曲「竹生島」に由来すると言われ、火防、豊饒の瑞獣

# 越後府中の守護所と館

## 「タケ」と「タテ」にみる権力否定

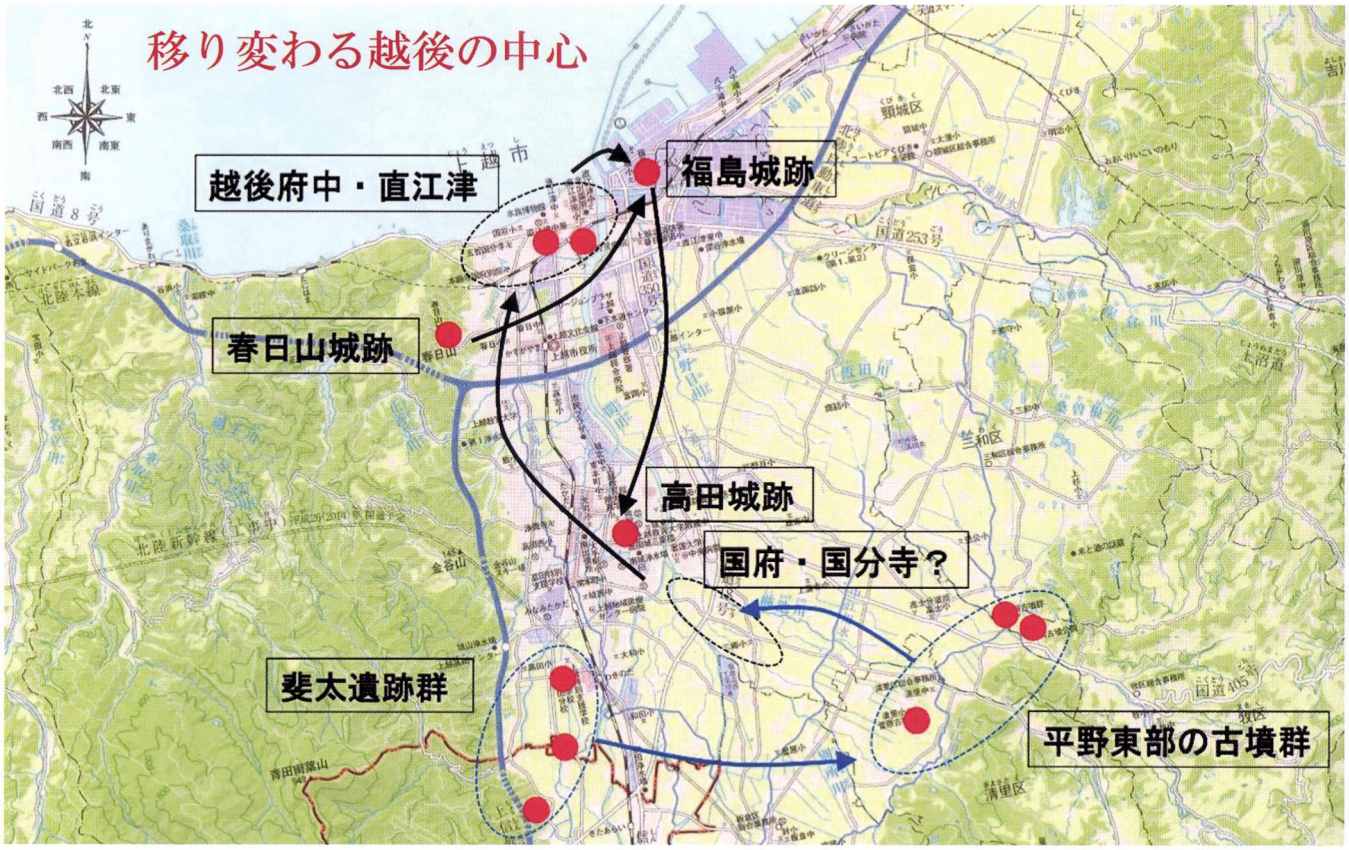
小島幸雄

### 1 はじめに

上越市内には、戦国時代から江戸時代にかけて築城された大規模な城郭が三か所、春日山城跡、福島城跡・高田城跡が知られる。同一市内でのこのような状況は全国的にも稀な、というよりも大城郭の密集する稀有な景観はどのようにして生まれたのだろうか。今回は、奈良時代に越後国府が頸城郡に置かれて以降頸城平野の中央から海岸線にかけて移動したことの意味を、特に一六世紀と一七世紀の越後府中に絞って「否定」をキーワードに考えてみたい。

その前に、去る一一月一二日に行われた「こしのくに国府フォーラム」をご紹介しよう。平成二五年、越前国（福井県）越前市で始まった「こしのくに国府サミット」は、翌年の加賀国小松市（加賀国府）からフォーラムを加えて開催され、七尾市（能登国府）、富山県高岡市（越中国府）と七年間続いたが、コロナ禍にあって二年間足踏みを余儀なくされ、やっと今年越後国府のまち上越市での開催にこぎ着けたのだった。上越市で開催されるのは越後国の国府が頸城郡にあったとされることによるもので、現段階で三郷地区とその周辺に古代の国府や国分寺がおかれたと考えられている。フォーラムでは新潟大学名誉教授小林昌二氏が和銅五年（八一二）に国域が確定した越後国の国府がいつごろ頸城郡に置かれることになったかを文献をもとに解説され、続いて新潟市歴史博物館長坂井秀弥氏が上越地域の遺跡と出土資料から国府と国分寺を考古学の見地から紹介された。

平成二六年（二〇一四）、高田開府四〇〇年祭が行われたことも皆さんのご記憶にあるだろうが、これも高田築城が古代国府から続く越後の国都の移動であったことを示すものだった。




上越市教育委員会提供

## 2 越後国府の移動

越後の古代国分寺が大字本長者原にあったのではないかとされたのは昭和四八年に刊行された「新井市史」（上巻）においてであり、国府が今池周辺にあったのではないかと考えられるようになったのは昭和五六年の今池遺跡の発掘調査からで、すでに四〇年が経過した。当時の文化庁河原純之主任文化財調査官が発掘調査中の今池遺跡の現地に立たれ、「国府ではない、とはいえないが主要な部分ではない」と話されたことを記憶している。

その後、国府は一二世紀後半には直江津に移動し、福島築城の慶長一二年（一六〇七）まで四〇〇余年の間、越後府中の繁栄を見届けた。福島築城は春日山城からの城の移動で語られるものではなく、越後国府の移動を意味している。福島築城については、港津の移動が経済機能を府内から奪取することを意味することなどから、堀氏が上杉権力の否定を図ったと読み解く、中西聰氏の見解もある（「守護所と戦国城下町」高志書院二〇〇六）。国府は二度目の移動をしたのであったが、府中のように四〇〇余年とどまることはなく、七年という短命の役割を終えて慶長一九年（一六一四）の高田築城で廃城となった。高田開府四〇〇年は、この築城から数えての年数だ。この移動は、国府津と国府を結ぶ水上交通による物資の移動が容易な地点を選択したと考えられる。

ここで他国の状況を見るため、国府サミットの提唱地である越前国に目を転じよう。越前の古代国府は現在の越前市、旧地名でいえば武生である。武生は九頭竜川の支流の日野川を上った平野の奥部に位置し、中世においても越前守護の館があって古代から続いて権力の集積地であったが、戦国時代に至って一乗谷を根拠にしていた

守護代の朝倉氏が権力を手中に収めて都市を築いたことで権力の移動が行われている。朝倉氏の一乗谷は足羽川の流域に位置している。朝倉氏は天正元年（一五七三）織田信長に滅ぼされ、代わって越前に入った柴田勝家は一乗谷には入らず足羽川を下って、より九頭竜川に近い、言い換えれば主要な津である三国港に近い現在の福井市に北の庄城を築いた。その後、結城秀康によって福井城が築かれて廃藩を迎えた。越前国は顕城のような狭い区域ではなく国内を転々とした例である。そして、移動の意味は越後国府と同じものだ。

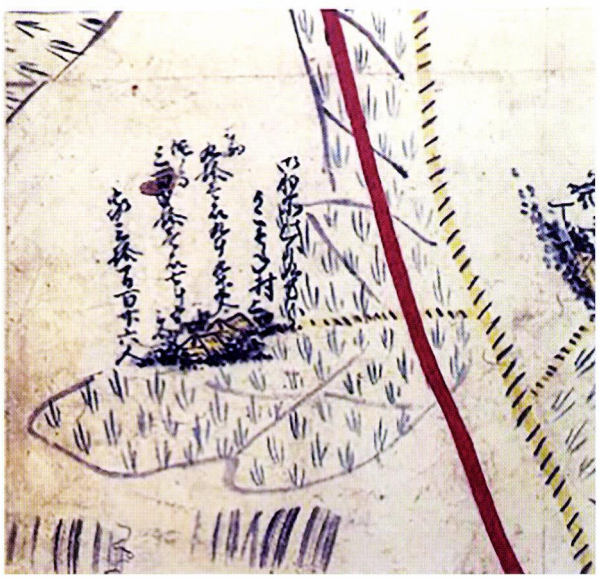
## 3 中世の居館と出土遺物（その一）

越後府中として知られる直江津地区には多くの中世の居館が知られている。平成になって、これまで知られていた府中を含め、顕城平野の関川右岸にも同様な居館が発掘調査されるようになったことで、府中ばかりでなく周辺の田園地帯にも屋敷跡の存在が知られることになった。私は上杉家に残る「越後国郡絵図」の顕城郡の東半部分の絵図が残っていたことから漠然と直峰城や古城といった表記は見ていたが、居館のようなものは描かれず、府中以外では居館のようなものはなかったのではないかと考えていた。しかし、平野部での居館が確認されたことは府中以外の館も存在したわけで、発掘調査の事例から中世の景観が考えられるようになったのであった。そこで、ここでは横曽根地区で調査された三遺跡から中世の景観を探ってみよう。

まず、平成五年に調査された横曽根Ⅰ遺跡を見てみよう。

遺跡は大字横曽根字「竹之内」という場所で確認された。現況は水田で集落は水田部より一段高くなっている。堀と考えられる溝は幅が五〜六メートル、深さは最大で一・五メートルを測る。後述する守護所（伝至徳寺遺跡）に近い規模である。出土遺物は一五世紀に位置づけられる中国製品が目立ち、少し時間の空白があって一六世紀末から一七世紀初頭の唐津焼もある。この時間の空白が問題となる。一六世紀後半の時期がよくわからないのだ。横曽根Ⅰ遺跡の全貌はわかっていないが、一辺が七〇メートル以上の規模であると推察されている。

横曽根地区にはこのほかにも二か所の屋敷と考えられる遺跡が調査された。横曽根Ⅱ遺跡とⅢ遺跡である。前者の地籍は「大字横曽根字大坪」、後者は「字一番割」だった。筆者が期待していた「竹之内」ではなかったが、いずれも館と考えられている。国絵図では横曽根は「よこそ子村」と表記され、御料所とあることから、景勝政権では直轄領となっていたことが分かる。



よこそ子村（慶長越後国絵図部分）
（上越市埋文センター展示資料より）

ところで、調査後しばらくして横曽根集落のすぐ南の荒屋集落の地籍名称を教えていただいたことがあり、荒屋地区にも「竹之内」という地籍があることを知った。発掘調査が行われたわけではないので断言できないが、館の存在が期待される。

竹之内の地籍名称は名立にも存在した。筆者が本誌45～47号で紹介したように、名立の灯台東側に「竹之内」という地名がある。ここの行政区は合併前から上越市であるのに対し、耕作者は名立区小泊の皆さんなのだ。地権者のお一人からお聞きした言葉は、「竹之内の固定資産税は上越市に収めていた」というものだった。

なぜこのような状況が生じたかを推察すると、「名立町史」によれば、御館の乱の頃は、名立は長尾景直の所領とされている。筆者はこの間の事情を、景虎側についた景直の所領を勝者の景勝が府中の空間を拡大するように茶屋ヶ原に加え、直轄領として「竹之内」にしたのであろうと考えた。写真にあるように「竹之内」の西に位置する尾根にはマイクロウエーブが設置され、眺望の良さは頸城郡内屈指のものであろう。そして、直轄領とした範囲はマイクロウエーブが建設されている尾根から名立谷浜インターチェンジ付近の「市の橋川」までであろう。

なお、現在の表記は「市の橋」となっているが、音が同じで違う文字となっているものと考えられ、「一の橋」が正解なのだろう。「名立町史」に「日の入城」なる城郭が登場するが、執筆された花ケ前盛明氏によれば、きわめて細長い尾根の造作が記されているだけで、城郭という雰囲気ではない。狼煙台のようなものかと思われる。その付近の小字には日の入がなく、「日の八」という小字がある。日の八を見ると入を八と書き違えたような気がするが、憶測は避けたい。



威信財といわれる中国製陶磁は守護所と同等の優品
（上越市教育委員会所蔵）



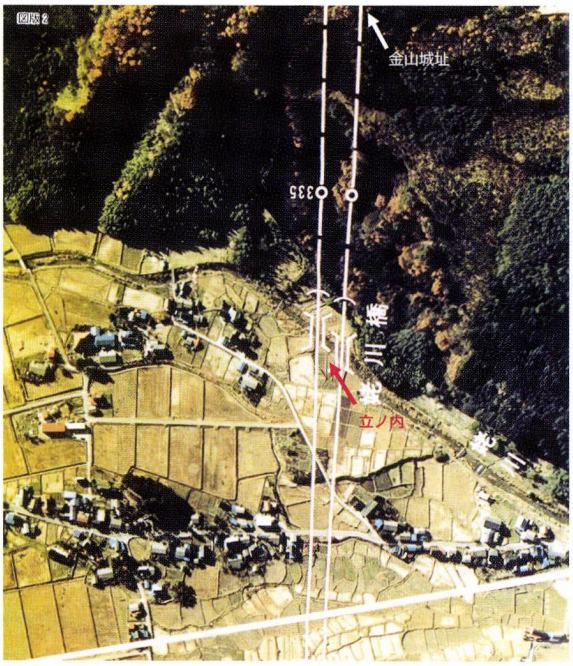
上　宇山と竹之内（手前の小屋のあたり）
下　マイクロウエーブ付近から能登半島遠望
（矢印は石動山とみられる）

## 4 中世の居館と出土遺物（その二）

次に、「タテ」という小字の遺跡と出土遺物を見てみることとする。筆者が初めて「タテ」という名称が付された遺跡の発掘調査に立ち会ったのは、昭和五八年「伝至徳寺跡」の確認調査である。伝至徳寺は後述する。

その後、昭和六〇年には糸魚川の早川で行われた「立ノ内遺跡」の調査にも参加させていただいた。北陸自動車道の調査で発掘調査が行われたもので、それを遡ること一八年前の昭和四二年に刊行された「糸魚川市における城館址―調査報告第1集」において植木宏氏が「立ノ内」という地名から館跡と推定していた。遺跡は高速道路の敷地となっているが、早川西詰の信号から新町方面に向かって高速道路の下の右側が遺跡だ。

遺跡は西側の山塊の頂部に築かれた金山城の居館と考えられていて、山城崖下の早川に向かってせり出した段丘上に位置する。出土遺物は一五世紀後半が主体を占め、一六世紀前半の早い時期には衰退したようだ。館としては限られた時期のもので、対岸の不動山城がその間の事情を語っているものと推察される。遺跡の周辺の小字を見ると遺跡名の「立ノ内」や「木戸本」・「堀切」などの屋敷を連想させる地名の多いことも注意したい。



糸魚川市立ノ内
（北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告集Ⅰより・加筆）

## 5 越後府中の調査状況

府中の中世居館について状況を見てみよう。平成四年、直江津駅南地区の区画整理事業が実施されることとなり、至徳寺跡と考えられてきた字屋敷・字前屋敷などの地名が残る地域の発掘調査が行われた。昭和三九年の「御館跡」の発掘調査以来、二八年ぶりに越後府中に発掘調査の鍬が入れられたのだった。調査開始から様々な出土遺物があると同時に、それまで春日山城跡の発掘調査では見たこともなかったような高級品の中国製陶磁器が次々に出土して、中世考古学では直江津が一躍注目を集めることになった。

伝至徳寺跡は、現段階では越後上杉家が使用した守護所と考えられているので、以後守護所跡と表記する。

さて、守護所跡の発掘調査で出土した陶磁器から本遺跡での活動期には波があり、第一期は一一世紀から一三世紀前半、第二期が一四世紀後半から一六世紀前半、そして第三期が一六世紀末から一七世紀初頭である。ここで問題とするのは、第二期と第三期の間に確認できる一六世紀の空白である。守護上杉定実が死去したのが天文一九年（一五五〇）であり、それ以降は謙信が実質的に国主の地位についたと考えられる。ここで注目したいのはまさに謙信の実質的な権力の掌握であり、嫡子がな

かった定実の死によって越後上杉家は断絶となり掌握が完成した。そして守護所跡の発掘調査もそれを如実に物語るように、定実死去前後の生活を示す陶磁器が全くと言ってよいほど出土していないのだ。はっきり言えば、謙信が実権を掌握して以降、守護所は活動を停止していたといえる状況が見えてきたのだ。

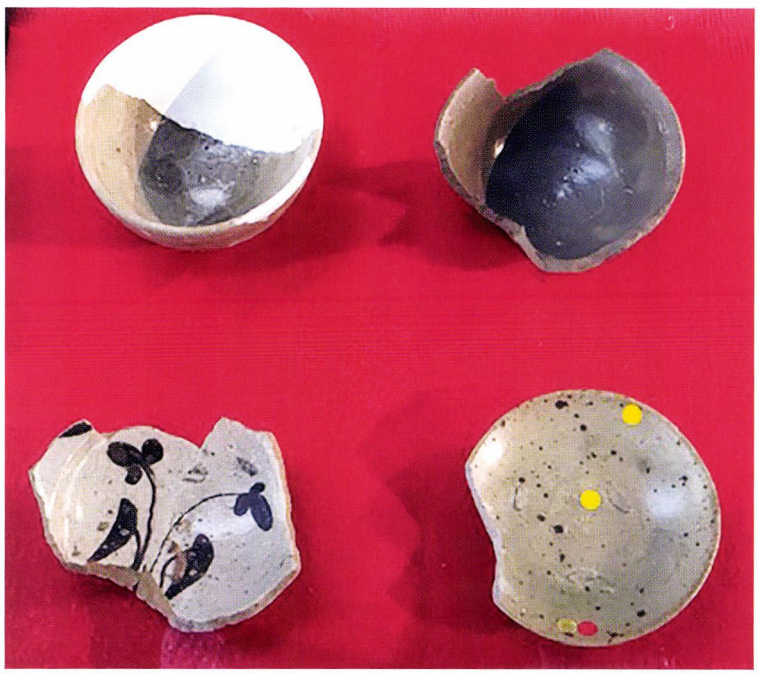
ところが、一六世紀末から一七世紀初頭に至って再度活動が確認できる。唐津焼が大量に持ち込まれているのだ。唐津の製作開始年代は一五九〇年ころとされているので、景勝の会津移封、もしくは堀氏入封の時期と重なる。前述のように謙信が使用していない空間を景勝が移封直前に使用するとは考えられず、堀氏による使用と考えた方が妥当であろう。また、唐津焼が館の堀から多く出土していることも注意したい。堀が意味をなさなくなり、機能を停止したので唐津焼などの廃棄場所となったと考えるべきだろう。

もう一点、所在の地名から考えてみよう。御館の所在する地名は「字御館」という。それに対し守護所跡の地名は「字屋敷・南屋敷・前屋敷・弥五郎屋敷」などで、御館跡とは全く違った表現となっている。「タテ」地名ではない。

越後府中の地形図と屋敷の想定される位置を示した。守護所跡区画内南側を斜めに東西に横断する道が描かれる。この道は今でも歩くことができ（すべてではないが断



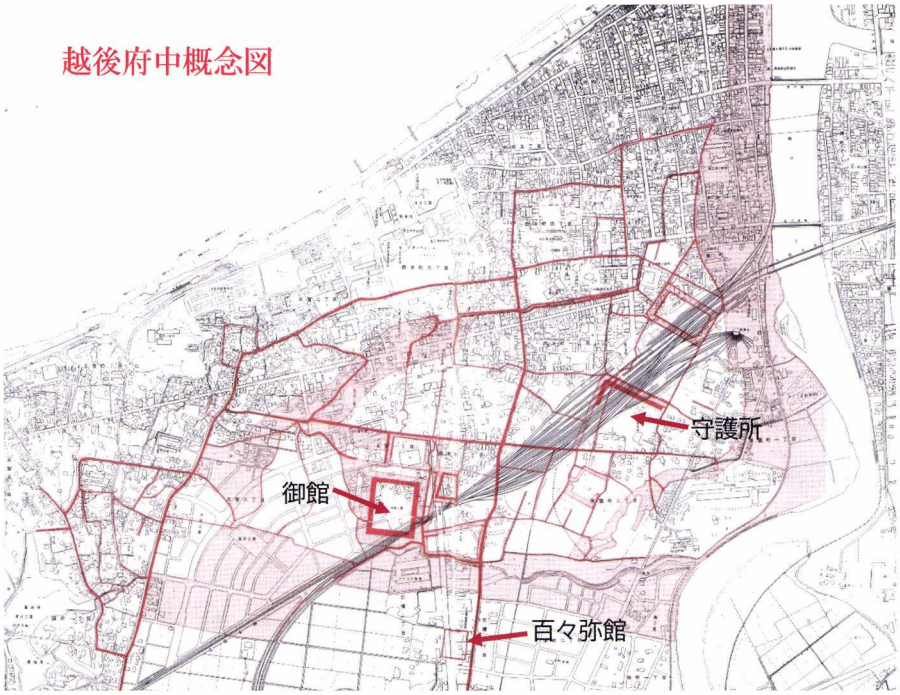
守護所跡から出土した 15 世紀の威信財（上越市史叢書 8 より）



守護所と考えられる館跡の堀から出土した唐津焼
（堀が埋められた時期を示すものと推定される）

続的に五智まで確認されている)、この道路の下を発掘調査した時に守護所跡の堀が見つかり唐津焼が大量に出したのだ。唐津焼が決定打となった。府中には「字大楽館」・「字金津館」など家臣と思われる名が示される地名があることにも注目したい、と同時に長尾館とされる守護所の北側にある館区割りは「字立の越」という地名で、守護上杉氏の館は「タテ」を使用していないのに、守護代長尾氏の館と考えられるものは「タテ」を使用しているのだ。

もう一点、謙信の国分寺再興を考えてみよう。謙信は永



(上越市遺跡詳細分布調査報告書より・加筆)

禄四年(一五六一)関東管領上杉家を相続して名実ともに国主待遇となった。国分寺の再興は、天平一三年(七四一)に聖武天皇の詔によって全国に建立されたものの再興、まさに古代における国守の仕事を再現することで越後国の民に権力を誇示したものと考えたい。

府中の館で発掘調査が行われて紹介したいのは御館跡だ。昭和三九年に調査されたもので、遺跡の調査そのものが珍しかった時代に当時の直江津市は特筆すべき仕事をしていたと思える。出土遺物は一六世紀のものが主体となっている。そして、隣の守護所跡の出土遺物が少なくなる時期に相当するようだ、したがって、御館は関東管領上杉憲政を迎えて造営されたとすることも加味しても、守護所に隣接してやや小規模な館が築かれたわけで、守護所と御館、過去と現在の比較、権力の否定を具現化させる設えだったのではないだろうか。なお、筆者はずっと御館が謙信の政庁と考えていることを付記する。

## 府中の館と否定の記憶
### ―まとめにかえて―

これまで、高田平野や頸城郡で調査された中世の館を見てきた。大字横曽根字竹之内で発見された幅が六メートルもある溝は、館(タテ)を囲んでいた堀であることが確認された。さらに、竹之内ではない地点でも堀をもつ館と考えられる区画が二か所も確認され、平野の中央でも中世居館の存在が知られることとなった。そして、これらの遺跡の活動期は一六世紀後半には及んでいないことも明らかとなった。

ところが、同じ時期に発掘調査が行われた直江津駅周辺の越後府中と考えられていた区域でも館の地名がない

区域で一辺が二五〇メートル以上の館が確認され、現在は守護所と考えられるようになっている。ここは「タケ」という音の地名ではないのだ。そして、守護所もまた一六世紀の出土遺物がないという調査結果だった。このほか、いくつかの「タケ」が館を示す事例も上げてみた。

さて、「タテ」と呼ぶ館を見てみよう。今回紹介したのは糸魚川市立ノ内や府中の御館である。これらにも一六世紀の出土品が豊富な御館跡もあれば、その時代の遺物が希薄な糸魚川市の立ノ内遺跡もある。タテとタケは音で内容を知ることはできないということになるのではなかろうか。

そこで、タテとタケはいずれも館だったとする仮説を地域で考えてみよう。

ここに気になる資料がある。「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ新井市坪ノ内館跡」の一〇ページに新井市周辺の居館という表があり、新井市と板倉町（いずれも当時）の二〇か所の館が記載されているが「タケ」の音は一か所もなく、いずれも「館・立・尾館」などだった。その数は二〇か所の内一四か所に上る。

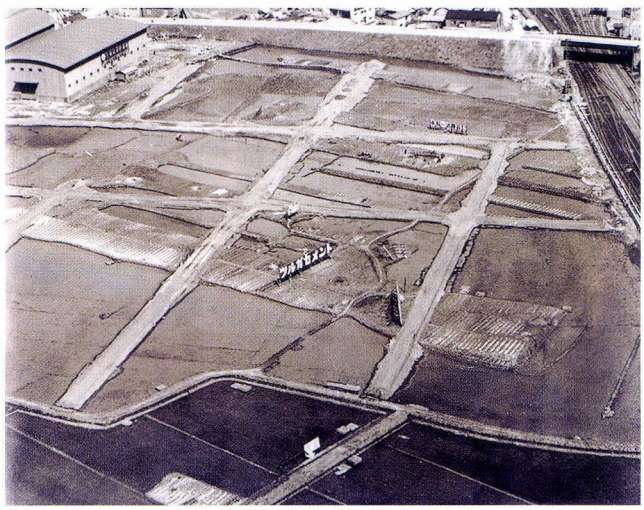
さて、結論に移ろう。筆者は、タテとタケはいずれも「館」を示す語と考え、「タテ」は尊称であり、「タケ」は尊称をはく奪するために「音」の変化で意味を不明にするための権力者の作法だろうと考えた。館の場所の権威を否定するために行われたものと考えたのだ。それには地域、館の場所が重要だったと考えられる。次に場所を考えてみよう。

まず府中においては「タケ」は存在しない。ところが周囲の横曽根と茶屋が原に隣接した海岸線に確認されるのだ。府中であるとすれば、親鸞の配所「竹之内草庵」があるが、これも含めて考えたい。

さて、「タケ」という「音」が権力側の否定の作法と仮定すると、一六世紀中頃に行われたその作法の実行者は謙信ということになる。筆者は以前から景勝が御館の乱後に行った作法と考えてきたが、守護所の遺物のピークを見ていくと謙信が浮かんできたのであった。しかし、名立区に隣接する「竹之内」は景直の存在を無視できず、やはり、御館の乱の後で行われた景勝の否定の作法とする考えに変更はない。そしてそれはどこで行われたかというと、府中の範囲に限られると考えるのが妥当で、広く行われたとは考えにくいだろう。名立区に隣接する竹之内は、景直の支配地を御料所とするための作法と思えるのだ。

以前、全県で中世居館の小字を調べたことがあったが、遺跡地図に記載されていた館の小字は、ほぼ「タテ」という音であったと記憶している。どうして頸城郡それも府中に限られた上杉政権の施策であったかといえば、国府から続く越後の最高権力の地ということが作用しているのではないかと思えるのだ。

（元上越市学芸員）



区画整理前の御館跡（現在の五智１丁目・上方が上越大通り）
（上越市史叢書８より）

## 歴史は「今日（きょう）」への手紙

### 残しておくべきもの 伝えておくべきもの

# されど〝かわたり〟もち〟



本誌の編集が終盤にかかる一二月一日、この辺りでは「川渡餅」という餅を食べる風習は誰もが知っている。

かつては、一一月三〇日の深夜から一二月一日の早朝、「カッタラモチ、ヤ（ヨ）イ」と、子どもたちが声を張り上げて売り歩いた。この風習が残る上越では上杉謙信公の故事に由来しているというのが、ほとんど一般的になっている。つまり、上杉謙信公が川中島の合戦の前夜、アンコロモチを作って将兵に与え、腹ごしらえさせて犀川を渡って大勝したというのだ。

「日本大歳時記」（講談社）によれば、一年の最後の一二月一日を「乙子（おとご）の朔日（ついたち）」として餅を搗いて祝い、「乙子の餅」を食べる。この風習は関東、中部地方にあり、川浸（かわびた）りの朔日、川渡（かわわた）りの朔日といって、川浸り餅、川渡り餅を搗いて食べたり、川に流したりすると水難に遭わないという。

群馬県のある地方では、武田信玄が家来にモチを持たせたところ、川を渡るとき落としてしまい、ちょうど川下にいた上杉軍が拾って食べ、元気になって勝利したと言い伝えられ「カワビタリモチ」と呼ばれているという。

当然、このような伝説を裏付ける資料があるわけではなく、永禄四年の九月を今の暦に直してみても、「川渡り餅」の一二月一日とはほど遠い。それにも関わらずなぜ謙信公の川中島合戦と結びついたのだろうか。

そこで、手元にある郷土史関連の本から「川渡餅」をひろって見た。

旧高田藩士庄田直道を中心に一〇年の歳月をかけて明治三四年に編纂を終了した「越後頸城郡誌稿」（越後訂正頸城郡誌稿）の風俗・年中行事には、「朔日、此暁カワタレ餅とて高田地方に売り行く小さく薄き小豆餅なり」とある。

布施秀治の名著「高田市史」（大正三年）の維新前の年中行事の一二月に「朔日暁、川渡餅を売り歩く―乙子の

餅とも云う。これを食えば水難を免ると伝う―」と記している。

昭和一二～一三年にかけて高田市初等教育研究会が児童用の副読本「高田読本」（三～六年生）を刊行している。その三年生向けには川渡餅の項で、子どもの質問に、謙信公が全軍に餅を食べさせて、「大変お勝になったことがあるということだ。それで、このへんでは川たり餅を食べると力がつく…」と、父親が説明している。

続いて、昭和一四年に高田商工会議所が刊行した「観光の高田」という本がある。これは北日本商工会議所連合会定期総会が開催されるのに合わせて編纂されたもので、高田を中心に上越全体、柏崎まで観光案内がなされている。そのなかで上越の年中行事の中に川渡餅が登場する。「一日の未明から子どもたちが『かわたり餅やい』と呼びながらあんころ餅を売って歩く行事で、高田市や直江津町ではとくに盛んで、全国的にも珍しい行事だとされているが、これは乙子の朔日の行事で、江戸では川浸餅といって食べると水難を免れると、俳句歳時記にも伝えられている」として、英雄と結びつけるこの風習はまことに面白く結構なことであると結んでいる。

昭和二八年刊「直江津町史」は民俗の項で、「観光の高田」と同様の解説を付して、謙信が「大勝した日は一二月一日であったように解釈している。行事を英雄と結びつけることは何れの地方にもある」と結んでいる。

昭和三三年の「高田市史」も乙子の朔日の風習が、謙信の川中島勝利説に結びついたものとしている。

新潟大学高田分校の渡辺六郎・中村辛一氏を中心に出された「越後くびき物語」（昭和四四年・新潟大学高田分校郷土研究会編）は、頸城一円の歴史を子ども向けに書いた、なかなか読み応えのある本である。そのなかにやはり「川渡りもち」という一節があって、なかなか興味深い考察が行われている（担当執筆者不明）。

本書も乙子の朔日餅をベースに考察を進めているが、十二月一日に食べるあんころ餅の名称として、東日本では「カワヒタリ」「カワブタリ」「カワビタリ」であり、西日本では「カワワタリ」「カワタリ」が多いとしている。

西頸城の山間地域でも古くから「カワフタリ」とか「カブタリ」という名前でこの風習が行われていたようなので、高田や直江津周辺でも当然行われていたと考えられる。寛保元年（一七四一）姫路から榊原家が入封すると、西日本の「カワワタリ」「カワタリ」が使われるようになったと推理し、それが明治になると幕藩体制から自由になり、新たに郷土の英雄上杉謙信公を敬愛する気持ちと結び付いたのではないか、と結んでいる。

高田天崇寺住職で郷土史家の稲荷弘信氏は、「写真・高田風土記」（昭和四五年刊）で、古来からの乙子の餅の風習であり、謙信伝説は後付けであると断定し、米沢市ではカビタリ餅というあんころ餅を食べると結んでいる。

最後に、新聞記者であった小林金太郎氏が書いた「わがまち上越」（昭和五五年）にも登場する。さすが新聞記者らしい取材がある。

郷土の英雄をしのび、健康を祝す行事だと市の観光宣伝書にのっているが、真疑のほどはわからない。「縁起物などというものは、大体、後日つけくわえるもので適当なものが多いと思われる」「いろいろな呼び名はあるが、川によって生計の道を立てていた渡し守や川辺の漁師たちは、商売繁昌や災難よけの願いをこめたであろうし、水難から子どもたちを守る親たちの願いをこめた祈りから生まれたものだろう」という元新潟大学高田分校の渡辺六郎先生の説や地域の呼び名についての先生の考察も

紹介している。

注目したいのは、川渡餅が姿を消した時代があったと、高田の多田屋本店の社長を取材している。同氏の昭和一六年一一月の日記に「申し合せで川渡モチを造らざることにす。売り歩く者一人もなし」とあり、物資統制の余波が、長い風習と名称をなくした暗い時代だった。と小林氏は述懐している。

これは先の「越後くびき物語」にも、戦後になっても「呼び売り」をしないのは、食糧管理法のせいだと説明している（米穀通帳廃止・昭和五六年食管法改正）。ただ昭和三〇年代に復活している地域もある。

このように見てくると、ある時期から謙信公に結びついてくることが分かる。しかし、いずれも〝なんとなく〟で、謙信公説を証明しているものはない。それでは米沢に言い伝えがあるのではないかと、かつて問い合わせてみたが、そのような伝承はないということであった。

筆者の明治二一年生まれの祖母は、時季になると決まって「川渡餅は謙信公ではない」、源義経公が奥州平泉へ落ちるとき、直江津の川岸の茶店で、モチを食べながら追っ手をやり過ごしたので〝かわわたりもち〟と言い、水難を逃れるのだと極秘事項のように語ってくれた。

この話は、「義経記」の「直江の津にて笈探しされし事」の段に登場する華園観音堂、今の観音寺でも密かに伝承されていることを以前聞いたことがある。

謙信公説があまりにも当たり前になりすぎて、義経説については、まったく相手にされなかったが、最近、大変興味深い一文を読む機会を得た。著者で東京在住の中村かつさんは旧姓片田といい、父は郷津油田の開発者片田初造である。明治一八年生まれで九七歳にして「おまんたち　がんばってくんない」（私家版）という思い出を書き上げている。その中の「昔の噺」に、

「源義経は兄頼朝に追われて奥州へ逃げる際、この荒川を舟から舟へ渡って逃げたというのです。この辺は屋島の源平合戦を思い眉唾（まゆつば）な気もしないでもありません。が、ともかく探題の目をかすめて、この悲劇の若武者を逃しおおせたという庶民の安堵があったのでしょう。

十二月一日の朝早くに「川渡餅ヤィ」とはやしながら子供が餅を売り歩きます。この夢はいつまでも続けてほしいものです」と結んでいる。

但し、「義経記」によればが奥州落ちを決行したのは、文治二年二月のことであるという。

ここからは大幅に横道にそれる。著者かつさんの曾祖父は八坂神社や泉蔵院に大燈篭を寄進している直江津屈指の廻船問屋で廻船持ちの片田八右衛門。新町通りに福永家とともに大きな店を構えていた。

祖父の片田順平は大変な感激屋で、明治七年、佐渡に配流となった順徳天皇の遺品（御尊骸）を運ぶ舟役を申しつかり、舟を新造し、新たに作った玄関には縮緬の紫白の幔幕をかけるなどして、御用を勤めたという。

また、源義経が壇ノ浦の敗者平時忠・時実の能登国への配流を引き伸ばし、頼朝による義経追放の一因となったと言われているが、時忠の配所、能登国堅田ノ浦は、かつさんによれば片田発祥の地である。

直江の津では、すべてが義経につながる……。

## 発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

## あとがき

「直江の津」平成一三年（二〇〇一）第一号創刊から前回で五〇号を迎えることが出来ました。これも、偏に直江津を愛する皆様のお陰と思い感謝の念に堪えません。この五〇号の軌跡の中で、コロナウイルスおよびウクライナ侵攻で混迷を深める経済状況を乗り越える「方法・ヒント」が多く含まれていると思います。

数多くの困難を脱し、常に前を見てきた直江津人から学ぶ事がたくさんあることを感じました。

「かわたり餅」もおいしく頂いたことから、来年こそは感染症への「勝ち時」を声高らかに上げたいものです。（事務局）

目次

特集〔直江の津〕50冊の総目次　4
頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ ⑧
越後府中の守護所と館
「タケ」と「タテ」にみる権力否定
元上越市学芸員 小島幸雄　20
歴史は「今日」への手紙
されど〝かわたりもち〟　28
巻頭エッセイ・私の直江津
直江津人として　笠原勇気　2

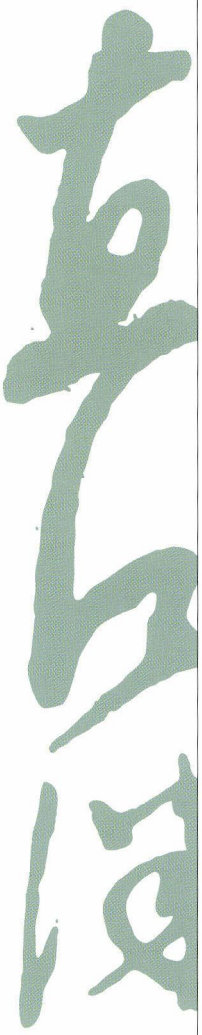
「直江の津」
第二〇巻一号　通巻五一号
発行日／令和五年一月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話㈹〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2023・1号

# 直江の津



発行／令和五年一月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五五〇円（税込）